

2026

1
Vol.

グッチョ

G u c c h o



誰かの行動が
誰かのワクワクになる

“〇〇し合う”を体現するメディアへ

地域福祉マガジン『グッチョ』は、久留米市地域福祉課が令和3年7月に創刊しました。

「何かを一緒にし合う」という意味を持つ筑後地方の方言を媒体名に、令和7年3月までに計40号を発行。誰でも、どんな時も、“支えぐっちょ”しながら暮らせるまちを目指して、支え合いの活動や取り組み、それに関わる人や団体などを紹介してきました。

そして同年秋、市と久留米AU-formal実行委員会との共同発行へ。取材や編集など発行のプロセスすらも「し合う」、よりオープンな共創メディアとして生まれ変わりました。関係するいろんな人がグッチョを舞台に関わり合いながら記事が生まれています。

このタブロイド判には、リニューアル以降にWEB上で発行した記事に加えて、地域福祉的なまちの話題を掲載しています。読んでいただいた人に“グッチョマインド”が生まれたら、久留米がもっと優しいまちになる。そう願いながら制作しました。

初めて知った方も、ずっと愛読していただいていた方も。

WEB版とタブロイド判の『グッチョ』を、どうぞよろしくお願いします。

久留米市 地域福祉課

グッチョ 共同発行にあたり

「地域福祉ってなに？」という問いから始まったわたし達の活動も、地域福祉マガジン『グッチョ』の発行と同じく丸5年が経ちました。

地域福祉とは、「人々の暮らしそのもの」のことであり「誰もが生活者として関わり合える地域を創造していくこと」なのではないかという考えに至っています。

例えば、自宅隣の一人暮らしのおばあちゃんの庭の草が伸びきっているけどそのまま見過ごすのではなく、「一人で手入れするのは難しいだろうから数人集まって草むしりしよう！」と自然と声かけ合えるような暮らし。

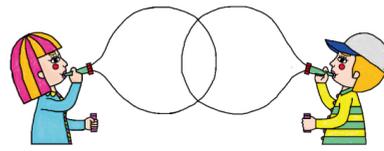
誰もが「地域と共に生きている」「誰かと共に生きている」という生活者としての気持ちや価値観がこの久留米に広まっていくと、きっと「地域共生社会」と呼ばれるような、“自然と豊かになれる暮らし”が実現するのではないかと考えます。そして、その暮らしが実現するように「叶え合う支援」という理念を掲げ様々な活動を行っています。

今回、久留米市の地域福祉課が発行してきた地域福祉マガジン『グッチョ』を民間団体であるわたし達も協働して制作させていただけることになりました。本誌を通して、“誰かに伝えたい地域福祉”や“やさしい気持ちになれる地域福祉”をお届けします。

そしていつか、皆様の発見した“地域福祉”もぜひ教えてください。

久留米 AU-formal(アフフォーマル) 実行委員会 代表 中村 路子

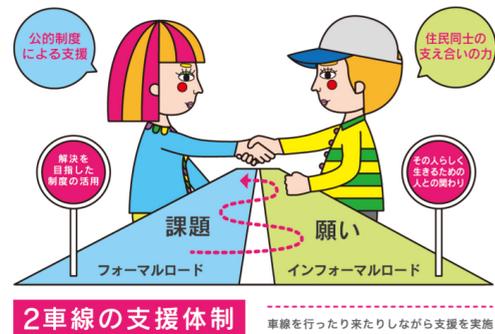
病気を抱えている、障害がある、生活が苦しい、人間関係が保てない、仕事が続かない。暮らしの中で困り事を抱える可能性は誰にでもあります。その時に相談に乗ったり解決に向けたサポートを行ったりする機関や窓口はあるものの、制度の対象に当てはまらずに、支援の狭間が生じてしまうことも。制度だけでなく、地域の関係性も含めて暮らしを支え合えるまちを目指し、私たち久留米AU-formal実行委員会は、久留米市から「叶え合う参加支援事業」を受託し、様々な活動を展開しています。



叶え合う支援とは？

課題を解決するだけでなく、願いを叶えるためにいろんな人が関わり合う視点を持つ。そして、公的制度による支援(フォーマル)と、住民同士の支え合いの力(インフォーマル)を重ね合わせて、2車線道路のように整備されれば、対応できることの幅が広がり、様々な人の主体性が生まれると私たちは考えています。

「できない」を解消する + 「したい」を叶える



叶え合う支援の4つのポイント

- 1 「課題を解決する」視点だけではなく「願いを叶える」という視点を持つ
- 2 「支援する人」と「支援される人」ではなく、お互いに目標を共有してフラットな関係性を保つ
- 3 多くの人が関わり合う機会を創出
- 4 様々な人の力が生かされる場面を作る

AU-formal project 「叶え合う支援」活動

多様な市民活動団体が活動する個人が集まり、久留米AU-formal実行委員会を立ち上げました。「叶え合う支援」という理念を提案し、実装に向けた基盤整理に取り組んでいます。

AU NETWORK

「叶え合う支援」という理念のもとに、叶え合うチームを作りネットワークを広げていく活動を行なっています。

AU ネットワーク会



地域の部活動



ロードプラン



AU SCHEME

企業や店舗が地域福祉・個別支援に関わるスキームを整備・推進していく活動を行なっています。

居場職



ロックオンワーク



企業教室



おはなし店



グッチョ



市民ライター活動



イベント



AU COMMUNICATION

地域福祉に多様な住民の関わり合いを生む事業デザインを整備・構築する活動を行なっています。

市民ライターが見たAUの活動

AUに会いに行こう!

「居場職」で自分らしく
はじめの1歩を踏み出す

記事：fuu (市民ライター) 取材協力：株式会社丸信



「フランクさ」で緊張をほぐす

今回、居場職の参加者は3名。丸信さんに入る前に、参加者と引率者がお互いに挨拶をして、和やかな雰囲気ですスタートしました。

私自身、参加前までは、「会社に行く＝フォーマルな服装・名刺交換・かじこまった雰囲気」などといった、よくある会社訪問に対するイメージを持っていました。しかし、工場見学があるということもあり、参加者の方々がスーツやオフィスカジュアルではなく、動きやすく、ラフでカジュアルな装いで参加されていました。企業訪問のようなキッチリとした雰囲気ではなく、フランクさもあり、服装ひとつ取っても、固いイメージが緩和されたように感じます。

参加者の中には、初参加の方もいれば、2回目という方も。居場職を何度か経験されている方が、少しリードしてくれる場面もあり、私を含めて初参加の人もすぐに馴染むことができました。

企業を知る、「学び時間」

10月に開催された居場職は約2時間のスケジュールで、工場見学と、懇談会の2パートが組み込まれていました。

工場見学では、丸信さんの企業説明の他、こだわりや特徴などもご説明いただき、学生時代に行った社会科見学のような雰囲気でも楽しく学ぶことができました。参加者も、普段なかなか目にしない光景に、終始目を輝かせており、「すごい!」、「おもしろい!」といった声が聞こえ、まるで童心に帰ったよう。

工場見学の中で、特に印象的だったのは、参加者が積極的に質問をしていたことです。企業の担当者

さんからの説明を受け身で聞くのではなく、積極的に参加をして、学ぼうとしていました。居場職では、参加者が見学や軽作業を体験しながら、五感でその職場の雰囲気を感じ取ることができるので、企業をより身近に感じることができます。



一緒に過ごす温かい時間

工場見学の後は、懇談会。場合によっては、軽作業が体験できることもあるそうです。

オープンな雰囲気、飲み物やお菓子を片手に、工場見学の感想を共有したり、パッケージの組み立てをしてみたり、和やかな時間を過ごしました。

途中、1人の参加者が持参していたオラクルカードを使って、占いの時間に。リーディングの内容に「当たってる!」、「まさに!」といった言葉が聞こえ、学校の休み時間のように笑い声が絶えないゆったりとした時間を過ごしました。このリラックスした雰囲気を会社で体験できるのも居場職の特徴のひとつです。

最初は、少し緊張している表情だった参加者の方々が、工場見学や懇談会を通して、グッと仲が深まったように思えました。はじめましての方とも、時間を共有することで、仲良くなり、コミュニティが広がる。これも居場職の醍醐味ではないでしょうか。



「居場職」を体験して

「なぜ今回居場職に参加しようと思ったのですか?」という私の質問に対する答えは三様。「はじめの一歩を踏み出すために参加しました。」「工場が好きだから参加しました。」「自分が参加することで、誰かの役に立てたらと思い、参加しました。」

参加したきっかけや理由は様々ですが、居場職を体験することで、ご自身が何か新しいスタートを切るための糸口になっているのではないのでしょうか。また、居場職の中でも、経験者の方が初めての方をリードしたり、参加者、引率者関係なく、一緒にその場を楽しんでいる様子が、まさにAU-formal projectの理念である「叶え合う支援」に繋がっていると感じました。





好きからつながる「地域の部活動」

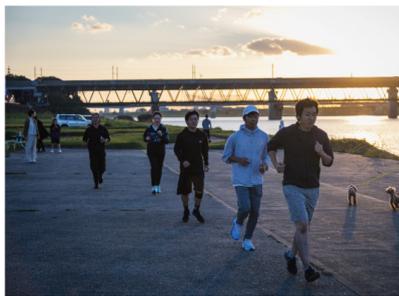
記事:池田彩 / (一社)お母さん大学福岡支局

運動部、アート部、ゲーム部、ゴミ拾い部、8ぐらむCOFFEE部など。今、久留米市で面白い「地域の部活動」が広がっているをご存知でしょうか？興味関心があれば誰でも気軽に参加でき、上手下手でジャッジされることもなく、それぞれが自然体で楽しめる。そんな地域の部活動をちょっと覗いてきました。

みんなで体を動かすって単純に楽しい

「地域の部活動」のはじまりは「運動部」です。人と関わるのが苦手だった2人の「フルマラソンに出たい」という願いを叶えるため、久留米AU-formal実行委員会と地元企業の社員と一緒に練習をするようになりました。「陸上競技場に定期的集まって、みんなで体を動かす。そのこと自体がとても楽しかった」と久留米AU-formal実行委員会代表の中村路子さんは振り返ります。その後、ソフトバレーをしたいと誰かが言いはじめたことで、体育館を借りることになりました。すると、友達を呼んでくる高校生や親子で参加する方も出てきました。バレーは素人だけど、子どもも大人も、年配の方も、一緒になって運動を楽しめる。気づくとそんな場になっていたのです。それが次第に「運動部」と呼ばれるようになりました。

現在は、毎月第1火曜日の18時～20時30分に活動しています。



好きということ思い出す

「子どもが家でずっと絵を描いていて、家族以外の人と接する機会がほとんどありません。気軽に何か参加できる所はないでしょうか？」と、ある親御さんから相談を受けた、久留米市手をつなぐ育成会の藤野薫さん。運動部のように集まって絵を描ける場ができればいいかもしれないと、絵を勉強中の執行明久さんに相談

してスタートしたのが「アート部」です。毎週火曜日14時～16時に所属団体が運営する「日々+CAFE」で開催。色鉛筆や絵具、タブレット、紙粘土を執行さんが準備してくれるため、手ぶらで来ても問題ありません。「絵は描くのは苦手で…」と子どもの付き添いで来て、最初は見ていただけのお母さんが試しに指で描いてみたら、とても素敵な作品ができあがり、本人も喜ばれていた様子は印象的だったそうです。また、よく参加する堀亜希子さんは「参加したことで、私は絵を描くのが好きだったということを思い出しました。素晴らしい活動をしている、手をつなぐ育成会の皆さんとも知り合えて、とっても嬉しいです」と話します。



これまで参加された方の作品

接点を持てなかった子の交流のきっかけに

血縁のない大家族をつくるために活動している「じじっか」で発足した「ゲーム部」は毎週金曜日の15時～18時に開催。現在、小学5年生から高校1年生までの6、7人が参加しています。高校生の田中親(ちかし)君が中心になって開



催していることもあり、大人を拒否し外とのつながりをシャットアウトしていた子も毎週参加するようになったそうです。「みんなでできるゲームを提案してやっています。ここで出会ったことで、ゲーム部がない日も、フォートナイトというオンラインゲームと一緒にしています。つながりができたことが、とても嬉しいです」と田中君は話します。



やりたい人が立ち上げて、行きたい人が行く

「地域の部活動」は、運動がしたい、絵を描くのが好き、ゲームがしたいという方が中心になって開催しているため、主催側も楽しみながら開催することができます。また、市民団体がすでに活動していることも「地域の部活動」として情報を共有し紹介直すことで、これまで出会えなかった人とつながるキッカケになるのではないのでしょうか。「こんなことをしている所があるから行ってみたら？」とその人にあわせて提案するカードが増えるし、提案された側も興味関心のある所に主体的に参加できる。「この取り組みが、個人や企業にも広がり、誰もが地域とつながり合える、叶え合う支援の場になっていくのではないかと考えています」と中村路子さんは期待を膨らませていました。

地域の部活動についてのお問い合わせ
久留米AU-formal実行委員会
<https://kanaeau.com/contact/>



クルメでカコメ ～囲んで生まれるほどよき時間～

記事:福々亭金太郎 / チーム「くるめウス」

読者諸氏は「囲」という言葉に如何なる印象をお持ちでしょうか。「電話についてたけど押す機会が無かった」という方は、固定電話の#ボタンが心に残る昭和びと。本日のラッキーアイテムは「鉄骨飲料」です。余談はさておき「囲」という文字には、①ものを中にまわりに連なる。②柵などで空間を区切る。といった意味があるそうです。安心感が保たれる空間に人々が集う。そんな場ではどんな時間が生まれているのでしょうか。今回はボードゲームを囲む場を作る青年が主人公です。



ズシリと重いリュックを開くと…

“みんな集まれ!!”待ちわびた子どもが、ホワイトボードにその言葉を大きく書きました。会場の施設には、すでに数組の親子が集まっています。「みかづきさんだ!!」子ども達の視線の先に、ズシリと重そうなウーバーバッグを背負う青年が現れました。飲食NGを掲げる施設職員の目がキラリ光ります。「みかづきさん」は、机にバッグを置くと、一つずつ丁寧に箱を取り出しました。箱の中身は肉汁あふれる唐揚げ弁当…ではなくボードゲーム!なんと20種類以上が並びました。さあ!ボードゲーム会の始まりです!



ズラリと並ぶボードゲーム。脂肪肝の筆者が気になるのはモチロン…。

ボードゲームの「良さ」を伝えたい

2022年以来、約60回開かれていた「久留米・鳥栖地区ボードゲーム会」。主催するのは「みかづきさん」こと三浦一樹さん。純粋にボードゲームを楽しむ場を開く一方で「ミナミナこどもきち」や「ゆるっほ」といった、子どもの学び・遊びの場を作る市民団体と一緒に、ボードゲームで遊ぶイベントを開いています。

「最初はボードゲーム好きな人達を対象としたボードゲーム会を開いていましたが、ボードゲーム愛好者は福岡市周辺に集中しているので、参加者が増えなかったんです。でも辞めたくないと思い、他の会との差別化を考えました。初心を思い出して、子ども達や親子にボードゲームの「良さ」を感じてもらおうと思いました」



「久留米・鳥栖地区ボードゲーム会」主催のみかづきさん。

対等に遊んでもらえる嬉しさ

みかづきさんが伝えたい「良さ」は、ご自身の切実な体験から生まれたものだそうです。「ちょっと暗い話なんですけど、昔いじめにあって性格が捻じ曲がっちゃってたんです。もう今は違うんですが(笑)、以前は人に対する憎しみが半端ではなかったんです。そんな中、私自身がボードゲームで遊ぶ場に出会い、少しずつ変わる事ができました。純粋にボードゲームが面白かったし、対戦相手が対等に遊んでくれる事、普通に接してくれる事がとても嬉しかったんです。」抱えていた生きづらさが軽くなるきっかけとなった場を、今度は自分が作りたい。そんな思いが会を続ける原動力となりました。

「ボードゲームの魅力は、子どもから大人まで色んな世代が楽しく交流できる事だと思っています。人によって『合う・合わない』がありま



自身も参加者に混ざりプレーする。難しいゲームは丁寧なルール説明も。

すが、そういう点が結果を左右したりもします。でも不思議なことに、久留米の会では結果が原因で参加者同士がケンカになることはありませんね。人に恵まれているんだと思います。」親子連れの参加者がメインですが、時には60代の参加者もいるそうで、多世代交流の機会にもつながっているようです。「初参加の方から『面白かった』と言ってもらえたり、『あのゲーム買いましたよ』と言ってもらえる、嬉しいし、やり甲斐を感じますね。」保護者からは「デジタル漬けなので、アナログのゲームにふれる機会になって良かった」と喜ばれる事も多いそうです。

安心感ある「遊びの居場所」をつくりたい

「たまに、子どもが遊ぶ声に、お年寄りがるさいと苦情を言うようなニュースを見るじゃないですか。今、子ども達の遊び場所が減っているんじゃないかと思っています。そういう中で、同じ志を持つ仲間を増やしつつ、誰もが安心して参加できる『遊び場の居場所づくり』も目指していきたいなと思います。子ども達だけではなく、中高生にもボードゲームを広めていきたいですね。」と意気込みを話すみかづきさん。ボードゲームを囲んで生まれるほどよき時間と関係性は、ますます広がっていくようです。



達成感あふれる笑顔で会場をあとにする。それにしてもリュックが重そう!

ボードゲーム会の情報や問合せはInstagramから
久留米・鳥栖地区ボードゲーム会@主催:みかづき
@kurume_tosu_board_game



点字紙のポチ袋から広がった世界

記事:池田彩/(一社)お母さん大学福岡支局

小さな出会いから、これまで知らなかった世界が見えてくる。

そんな経験はありませんか？

今回の出会いは点字のあまり紙で作られたポチ袋。

その小さな扉を開けた途端、点字の世界が目の前に広がりました。



私たちらしい出会いのキッカケを作りたい

久留米市の広報紙「広報久留米」には点訳版と音訳版があります。その点訳版のあまり紙を使ってポチ袋を作り販売をする、とご近所に住む坂井恵子さんが話をしてくれました。

坂井さんは久留米市身体障害者福祉協会の女性部の代表でもあり、水引アーティストでもあります。さっそく作っているところを訪ねてみると、一つひとつ丁寧に作られたポチ袋に色とりどりの水引をあしらった可愛い作品が並んでいました。日本身体障害者福祉大会で点字の紙を使った作品を見かけたことから水引をあしらったポチ袋を思いつき、さらにはNPO法人クローバーさんより、「作業場が空いているので使いませんか」と声をかけてもらったことが、はじめる大きなキッカケになったそうです。「ずっと私たちらしい取り組みをしたいと思っていました。障がいのある私たちは、自分たちの範囲でみんな一生懸命に生きていて、平日頃から健常者の方とも友達になりたいと思っています。けれど、知り合う機会がありませんのも事実。この点字紙のポチ袋から、少しずつ知り合う機会につながりたいなと思い作っています。それが一番の願いです。」と嬉しそうに話をしてくれました。



左から井上千代香さん、坂井恵子さん、久保恵美子さん
(久留米市身体障害者福祉協会の女性部の皆さん)

厚みから感じる点訳版に込めた思い

次に、久留米市広報戦略課に伺い、広報久留米の点訳版を見せてもらうことにしました。広

報久留米の点訳版は昭和46年にスタート。現在は、パソコン点訳コミュニケーションの会「点コミの会」のボランティアメンバーが毎月点訳しています。発行された冊子は、広報戦略課から久留米市障害者福祉課、久留米市内の各総合支所、社会福祉協議会、久留米市立中央図書館に設置され、希望者には発送もしているそうです。通常は数ミリしかない「広報久留米」ですが、イベント欄まで細かく点訳しているため、点訳版になると3センチくらいの厚みになっていました。「点訳版を読んでくださった方に久留米市の動きやサービスが伝わることで、暮らしの安心感が高まればと思います。」と広報戦略課の上原敬子さんは話します。

視覚に関する交流拠点一佐賀「あいさが」を訪ねて



案内をしてくれた長谷部寿子さん、筆者、上瀬静香さん 「あいさが」の前で

久留米市から車で約1時間。佐賀市に「佐賀県立視覚障害者情報・交流センター あいさが(旧佐賀県立点字図書館)」があると聞き、行ってみることにしました。

ここは視覚に関する交流拠点。相談支援、点字図書、録音図書(テープ、CD)の貸出・閲覧、広報誌の点訳・音訳、ボランティアの育成、見えない、見えづらくても使いやすい便利な道具の展示紹介もあります。白杖からお茶碗、電化製品、拡大読書器などもあり、高齢で見えづらくなってきた方の相談も受けているそうです。点字図書の蔵書数は7000冊。直接借りに来られる方もいるそうですが、電話で受け付けて郵送することが多いそう。

一番驚いたのは、点字図書の作成には点訳者1人につき1冊で1年ほどの時間を要するため、全国で1つの本(作品)ごとに1冊だけ点字図書が制作されるとのこと。サビエ図書館という視覚障害者や活字による読書が困難な方を対象としたインターネット図書館にすべての点字図書が登録されており、「あいさが」にはない本も取り寄せてお届けしていると教えてくれました。

小さなポチ袋が教えてくれたこと

点字のことをもっと勉強してみようと思い久留米市図書館を訪れました。手にしたのは、絵本『6この点 点字を発明したルイ・ブライユのおはなし』。ルイ・ブライユの生い立ちや失明の経緯、その後の暮らし、そして点字を生み出すまでの苦労がやさしい絵とともに描かれていました。その壮絶な人生に胸を打たれると同時に、坂井恵子さんたちの点字のポチ袋に込められた願いと、この絵本との出会いが、私を点字の世界へと導いてくれたように感じました。また、普段どれほど自分が視覚に頼って生きているのか。そのことにも改めて気づかされました。

ポチ袋のような“小さな扉”は、きっと私たちのまわりにまだまだたくさんあると思います。その扉をそっと開けて、中をのぞいてみる。そんな一歩が、新しい世界につながるかもしれません。



『6この点 点字を発明したルイ・ブライユのおはなし』
(ピーター・ウィンクラー作/ナンシー・ルー・ロメオ絵/
徳永慶元訳/岩崎書店)

広報久留米 点字版のお問い合わせ先:
久留米市総合政策部広報戦略課 0942-30-9119

あいさが 0952-26-0153

ポチ袋についてのお問い合わせ先:
久留米AU-formal実行委員会
<https://kanaeau.com/contact/>



段ボールが紡ぐ、無限の想像力と小さな一歩

記事:高橋米彦/Chietsuku project

久留米市荘島町にある地域の居場所「ぶらっと・荘島」。そのカウンターに置かれたある作品を一目見た瞬間、心を驚かされたような感覚を覚えました。その作品は、誰もが知るお菓子のパッケージデザインを、段ボールを切ったり貼ったり、時には薄く剥がすことで驚くほど精巧に素材の質感や色を表現されていて、ただならぬオーラを放っていました。



創作のルーツは、病と向き合った時間

これらの作品を生み出したのは、久留米市在住の中学3年生の男の子。衝撃を受け「ぜひ、この男の子に会って話を聞きたい!」という衝動に駆られ、私たちは早速、作者である井上琉斗(りゅうと)くんに会いに行き、ご本人とお母さんにお話を伺うことができました。

「琉斗は小さい頃は割り箸で銃を作るなどしていた、昔から手先がとても器用なんです。なんでも分解するのが大好きでしたし、気分が乗るとどこまでも没頭する集中力がありません」とお母さんは語ります。

琉斗くんが現在の創作活動に没頭するようになったきっかけは、体調を崩して2025年4月から入院をしていた3ヶ月間の間に始めたウッドパズルでした。



ぶらっと・荘島のカウンターに展示してあった段ボールアート。
市のこども子育てサポートセンターから紹介があったのが設置のきっかけ。

家の中を見回すと、ウッドパズルでできたメリーゴーランドや時計などが所狭しと飾られています。「琉斗の部屋はいつも木の香りでいっぱいなんです」とお母さんが言う通り、部屋はウッドパズルでぎっしり。このほとんどを入院中に作り上げたというから驚きです。複雑なものでも約6時間で組み立ててしまうほどの集中力で、次々と作品を生み出していきました。お母さんは「もう終わったの??早い!もう少し時間かけて作ってよ!」と内心思っていたようです(笑)

退院後もまだ体調が優れず、今に至っても家を出ることが困難です。そんな琉斗くんが次に熱中したのが「段ボールアート」。最初に作ったのは、彼の頭の中のイメージを形にした「茅葺き屋根の家」でした。段ボールのあらゆる部位を組み合わせ、屋根の質感や窓の表現が緻密に工夫されていました。最近作った炭酸飲料水のボトルは、展開図を想像しながら色や厚みの違う段ボールを選び、丸みや素材感を表現していました。



入院中に琉斗くんが作ったウッドパズルが部屋中に所狭しと飾られている。
完成度が高く、実際に動いたり、使えたりするものも。

無限の想像力と「希望」

琉斗くんが段ボールアートの魅力を尋ねると、返ってきたのは非常にシンプルな答えでした。

「作っている時がとても楽しい!」

次々とアイデアが降りてきて、一つ出来上がったら、次はこれ、と創作の過程そのものに夢中で、段ボールアートを始めてまだ3ヶ月という短期間にも関わらず、数々の楽しい作品が生まれています。「ものにもよりますが、大体1週間くらいで出来ます。難しい方が楽しいんです」と笑顔で話してくれた琉斗くん。数ある作品の中で一番難しかったのは「スニーカー」だそう。細部に渡るこだわりを感じられるその完成度もまた、観る人をワクワクさせます。

「将来の夢は建築家。」琉斗くんが語ってくれた言葉に強い意志を感じました。器用な手先、誰にも真似できない想像力で作り上げられる、琉斗くんの段ボールアートは、彼の将来の希望に向かう確かな礎を築いていると感じました。



ウッドパズルの集時と琉斗くん。
将来の夢をはっきりと力強く語ってくれた。

作品が繋いだ、小さな「一歩」

取材の翌日、お母さまから喜びのメッセージをいただきました。

「あの日、取材のお祝いで外食に行きました。10ヶ月ぶりに琉斗と家族みんなで外食ができたんです!」

琉斗くんは終始笑顔で食事をしていたそう。「自分の段ボールアートを皆さんに見ていただいて自信ができたんだと思います」とお母さんは続けます。

取材に行かせていただいた私たちも、身体が中心が暖くなるような嬉しい気持ちで胸がいっぱいになりました。琉斗くんの活動を、これからもずっと応援していきたいと強く感じた取材でした。



段ボールアートの話を終始笑顔で楽しそうに話をしてくれた琉斗くんとお母さんと愛犬ムギちゃん。

段ボールアートについてのお問い合わせ
久留米AU-formal実行委員会
<https://kanaeau.com/contact/>

PRODUCT



無添加の浴用・化粧用石鹸の残りを使用



#のこりものには福がある石鹸

記事：日野弘子(市民ライター)

沢山の想いが詰まった石鹸

昭和7年創業、まるは油脂化学株式会社。まるは油脂は、今も手造り、無添加にこだわり、昔ながらの製法も行いながら、石鹸の質を高めています。今回紹介する「のこりものには福がある石鹸」は、製造過程で機械に残ってしまう石鹸のムダをなくす、という想いから生まれた商品です。物を大事にする手造り石鹸を拡げる販促品として、イベントや市の行事などで皆さんに配られています。この石鹸は、無添加の浴用・化粧用石鹸の残りを使用しているのでそのまま川に流れ出ても自然に還るため、地球にも優しい。まさに「のこりものには福がある」石鹸です。

使い捨てが当たり前になっている現代に、もったいない事を教えてくれているような石鹸。沢山の想いが込められたこの石鹸を皆さんの想いで拡げていく事ができたら、とても素敵な事ですね！

沢山の想いを詰め込んだ「のこりものには福がある石鹸」。小さな繋がりが大きく広がっていく事を願っています。

のこりものには福がある石鹸 お問い合わせ
まるは油脂化学株式会社
〒830-0002 久留米市高野2丁目8-53
<http://www.nanairo.co.jp/>

#久留米おはじき

記事：サワシタナオ(市民ライター)

久留米の名産品や名所を描く

子供の園の送り迎えで通る道すがら、いつも気になっていた小さなお店。ガラス張りの店内には機織りの機械が見えます。そこは障害を持った人がアートを通して自身を表現できる場。studio nuccaという就労継続支援事業所です。今回こちらで作られている久留米おはじきについてお話を伺いました。久留米おはじきは、福岡市を代表するお祭りの1つである放生会の筥崎宮おはじきをヒントに、こちらのスタッフさんが企画したそうです。元々アート活動の一環として、陶芸も行っていったことから、その技術を活用し

て出来るものを作りたいという思いでこの商品が生まれました。手のひらよりも一回り小さいかわいいサイズ感の粘土を素焼きしたものに、久留米の名産品や名所が、丁寧に描かれています。

素朴でも手の込んだ作業であることが伝わってくるおはじきを一つ一つ手に取り、これは何の絵だろうと眺めるのも楽しいひとときです。

久留米おはじき お問い合わせ
studio nucca
〒830-0037 久留米市諏訪野町2742-4
Tel:0942-65-3433 / <https://nucca0.wixsite.com/studionucca4>

#リリボン「小物」

記事：サワシタナオ(市民ライター)

手仕事の循環

ひとり親や子育て世帯の「こうなったらいいな」を叶え合うために始まった居場所「じじっか」。血縁はなくとも大家族のように、地域社会と共に育ち・育て合うこの場所で生まれたのがリリボンプロジェクトです。リリボンとは、じじっかに寄付された衣類のうち、汚れなどで着られなくなった布を裂いて編んだもの。1m編むごとに、寄付で集まった食品や日用品などと交換できる仕組みです。子どもたちも慣れた手つきで編み、時には小さい弟のために品物を選ぶこともあったそう。集まったリリボンは、小物などに加工して販売し、その収益は活動費に充てられています。最近は色ごとに整

理したリリボンを新たな素材として活用する試みも進行中です。もらうだけで終わらず、編んで交換する「手仕事の循環」が、この居場所を続けるための大きな支えにもなっています。

リリボン お問い合わせ
じじっか(一般社団法人umau.)
〒830-0048 久留米市梅満町32-4 久留米食糧エルピー電化 2F
<https://umau-llc.localinfo.jp/>

小さいかわいいサイズ感の粘土を素焼き



新たな素材として活用



PLACE



日々+CAFE

OPEN 10:00 CLOSE 17:00 (土日祝は休み)
〒830-0023 久留米市中央町33-16
TEL : 0942-27-7970

「いらっしゃいませ」明るい店内に、メンバーの声が響きます。地域での支え合いは、つながりをつくるのが第一歩。誰もが立ち寄り、出会う居場所をめざし、設立から50周年を迎えた「久留米市手をつなぐ育成会」は、2023年11月に「日々+CAFE」をオープンしました。野菜たっぷりスープ付きのランチは好評で、お昼の時間は満席になることもしばしば。障害のあるスタッフは、野菜を洗ったり切ったり盛り付けたりそれぞれ

ランチメニュー 550円

- 🔥🌳 おにぎりランチ
- 💧 パンランチ
- 🍷 カレー or ビビンバ丼

れ得意なことを見つけています。オーダーをとることに失敗することもあります。お客さまと楽しく交流しています。「日々+CAFE」は、第4土曜日にこども食堂の「おにぎり食堂」、毎週火曜日には「アート部」を開始しました。障害のある人も、子ども・高齢者も、自然に交流できる場として「日々+CAFE」を身近に感じていただき、たくさんの方に、様々な形で利用していただける居場所になって欲しいと思っています。

コミュニティースペース ぷらっと. 荘島

OPEN 9:00 CLOSE 17:00 (土日は休み)
〒830-0042 久留米市荘島町9-10
TEL : 0942-65-5922

一般社団法人ぷらっとどっとは、地域のさまざまな人たちが出会い、つながり、安心して過ごせる場づくりを目指して活動しています。コミュニティースペース「ぷらっと. 荘島」は、児童発達支援事業所「出会いの場Leo」に併設されており、誰もが気軽に立ち寄れる「地域のお茶の間」として、お茶を飲みながらほっとできる場所です。日中は子どもたちの元気な声が聞こえ、訪れた人が思わず笑顔になるような、あたたかな空気が流

おすすめメニュー

- ホットサンド、キーマ風カレー、うどん、自家製レモネード

れ、安心して相談できる環境を整えているのも特長です。また「ぷらっと寺子屋」では、小学生を中心に地域の大人や学生、保護者が共に過ごし、学びや体験を重ねています。工作や料理、茶道などの多彩な活動を通じて、地域全体で子どもたちの育ちを支えています。さらに「8ぐらむCOFFEE」の製造・販売や市民団体との協働を通して、人と人、地域と社会をつなぐ取り組みも広がっています。ぷらっとどっとは、誰もが「ほっと」できる場づくりを久留米の街に広げていきます。



BOOK



風をとおすすめレッスン 人と人のあいだ (シリーズ「あいだで考える」) 著者：田中真知 出版：創元社

福祉という言葉から、介護や子育て、貧困や孤立といった個別の課題を思い浮かべる人は多いだろう。けれど地域福祉となると、制度や支援の枠組み以前に、人と人との関わりそのものではないだろうか。SNSでのつながりが日常の感覚として深く染み込んだ現代において、人と人のあいだにある意味や関係性、そこに流れる時間や物語を、あらためて見つめ直すことが求められている。

本書は、「自分とは何か」という問いから出発し、環境や他者が私たちのあり方にどれほど影響を与えているのかを静かにたどっていく。中東・アフリカを旅した著者が、出会った人々との会話や、立ち止まって過ごした

時間の記憶を手がかりに、対話とコミュニケーション、人との距離や価値観の捉え方について語っていく。それらは、私たちが無意識のうちに抱いている「当たり前」や常識をゆるめてくれる。病気や障害によって隔たりが生まれるように感じるのも、見えている世界がそれぞれ異なるからにすぎない。自分と異なる他者を知るとは、その人の世界が確かに存在し、この社会のなかで日々営まれていることを認識し続けることだ。本書は、自分という存在が、常に他者とのつながりからできていることを教えてくれる。

石井勇 / MINOU BOOKS

EMOTIONS

目に入れても痛くない (男性 30代) / ちゃぶ台をひっくり返してやりたい (女性 40代) / 目の前で雷が光って周りが見えなくなった (女性 60代) / プレゼントをしたら石をなげられたような気分 (女性 60代) / お湯から上げるとき、マシュマロみたいだった (女性 50代) / カンガルーのようにお母さんごと抱きしめたくなった (女性 30代) / 縁側で日なたぼっこをするようにほっこりした (男性 40代) / ジングルの中のオアシスのようだ (男性 50代) / 巨大なブーメランをなげてやりたい (男性 30代) / オウムをプレゼントしたい (女性 40代) / 川に流したい (男性 40代) / その甘さでぜんざいをつくりたい (女性 40代) / 二次会に行きたかったのに解散になったときくらい切ない (男性 40代) / クレーンゲームでめっちゃデカイぬいぐるみを1回でとれた時くらい嬉しい (女性 40代) / 子どものように水たまりにバシャバシャはいりたくなるくらい嬉しい (女性 40代) / この瞬間を一時停止して一生そのままにしたい (男性 40代) / 肘と肩が壊れるほど手を振りたい (男性 40代) / 冬にストーブで焼いたお餅を食べたときにほっこりした (男性 40代) / 部屋の中が急に夜になったのかと思うほど悲しい (女性 30代) / 真っ暗な長いトンネルでやっと出口の光が見えたような気分 (男性 50代) / 部屋の片づけをしたようにスッキリした (女性 50代) / 床が抜けるほど地団駄を踏みたい (男性 50代) / 寒い朝の布団の中のような気分 (女性 50代) / 塩おにぎりをぱくついた瞬間のような気分 (女性 50代) / ガッツポーズの握力で林檎をジュースに出来るくらい嬉しい (男性 40代) / お風呂上りにビールを飲んだ気分 (女性 50代) / どの台で打っても絶対にフィーバーする位に最強の気分 (男性 40代) / 凍え切った体で温泉に入った時のような気分 (女性 50代) / 全身の毛穴から言葉が飛び出してくる (女性 40代) / みんなとハイタッチしてまわりたくらい嬉しい (女性 40代) / 敷布団にひっぱられて掛け布団に押し戻される気分 (男性 50代) / 信号に一度も引っかからずに目的地に着いた時くらい嬉しい (男性 40代) / 急に重力が100倍くらいになったようにがっかりした (男性 40代) / お金を貯めてやっと買ったパソコンを次の日に子どもに落とされたくらい悲しい (女性 40代) / なかなか出来なかったビンゴがようやく出来た時くらい嬉しい (男性 40代) / 遠距離恋愛中の彼が自分との距離より遠い女と恋愛を始めていたくらい悲しい (女性 40代) / 嬉し過ぎて宇宙に届くくらいの高い高いをしたくなった (女性 40代) / 電信柱の上からみんなに喜びを伝えたいくらい嬉しい (女性 40代) / 注文したメニューと別の料理が来ても許せるくらい嬉しい (男性 40代) / 今すぐスイカ割りをしたくなるくらい腹が立つ (男性 40代) / 心のとびらがパタンと閉じる音がした (男性 50代)

地域福祉は難しい、特別なことだと捉えられがち。でも、関わっている人たちが抱く感情は、私たちが日々抱く感情と同じ。地域福祉に関わっていて嬉しかったこと、辛かったこと、みんなの思いを集めました。わかる、わかる、と頷いたり、クスッと笑いながら、みんなの声に耳を傾けてみてください。

AU-formal Project

病気を抱えている、障害がある、生活が苦しい、人間関係が保てない、仕事が続かない。暮らしの中で困り事を抱える可能性は誰にもあります。

その時に相談に乗ったり解決に向けたサポートを行ったりする機関や窓口もいくつもあります。しかし、制度の対象に当てはまらなかったら、支援の狭間が生じてしまうことも。

制度だけではなく、地域の関係性も含めて暮らしを支え合えるまちを目指し、多様な市民活動団体で活動する個人が集まり「久留米AU-formal (アウフォーマル) 実行委員会」を結成しました。久留米市とともに「叶え合う支援」という新しい支援の取り組みを進めています。



グッチョについて

グッチョという言葉は「何かを一緒にし合う」という意味を持つ筑後地域の方言です。グッチョは、日常の延長線にある支え合いの活動や取り組み、それに関わる人や団体などを紹介する"地域福祉マガジン"です。

2021年7月に創刊したグッチョは、2025年9月に関わり合ってつくる共創のメディアへ生まれ変わりました。発行媒体も、冊子からWebに形を変えて継続発行しています。



市民ライター募集中

市民ライターを募集しています。私たちの活動を取材・執筆していただけますか？

お問い合わせは

AU-formal Project
ホームページにて



久留米AU-formal実行委員会：中村 路子(umau.)、藤野 薫(久留米市手をつなぐ育成会)、秋満 美沙子(ぶらっとどっと)、樋口 由恵(umau.)、津野 稔一(くるめ出逢いの会)、畠中 茂生(くるめ災害支援ネット「ハッシュ#」)、高橋 米彦(Chietsuku project)、池田 彩(お母さん大学福岡(ちっこ)支局)、月田 尚子(Chietsuku project)、古賀 円(Chietsuku project)、おきなまさひと(くるめ協働CASE PJ)、川嶋 陸己(Team KURUMEUS)、宮崎 千恵(umau.)、半田 満(久留米移住計画)、佐々木 信行、甲斐 裕二

久留米AU-formal実行団体：特定非営利活動法人 久留米10万人女子会、地域活動応援塾・くるめ、Chietsuku project、久留米移住計画、一般社団法人ぶらっとどっと、一般社団法人umau.、特定非営利活動法人 久留米市手をつなぐ育成会、特定非営利活動法人くるめ出逢いの会、心眼ハート♡あひず、お母さん大学福岡(ちっこ)支局、くるめ協働CASE PJ、くるめ災害支援ネット「ハッシュ#」、ツインズクラブ、認定特定非営利活動法人 わたしと僕の夢、TEAM KURUMEUS(チームくるめウス)

※順不同

このタブロイドは、久留米市による叶え合う参加支援事業の一環で制作しています。

地域福祉マガジン
グッチョ

発行日：2026年2月8日
編集・発行：久留米市健康福祉部地域福祉課、久留米AU-formal 実行委員会
お問い合わせ：〒830-8520 久留米市城南町 15-3 Tel:0942-30-9175 Fax:0942-30-9752
印刷：福博印刷株式会社

